電子ブックを導入して
－順天堂大学図書館の，その後の事例から－

城山泰彦
順天堂大学図書館

Ⅰ．背景と目的

筆者らは，順天堂大学図書館（以下，当館）での電子ブック（医学系洋図書）のタイトル数を増加させる取り組みについて，昨年大会のポスター発表で報告し，事例報告をまとめた [1)]。電子ブックの契約は，選書や契約条件が冊子体図書や雑誌とは大きく異なる独特のしくみであった。本発表では，一昨年の導入以降の，電子ブックのタイトル数追加の取り組みや，利用者に向けて契約するタイトルの視認性を高める試みについて報告したい。

Ⅱ．方法　導入した後の対応

当館の選書方針では，洋図書は可能な限り電子ブックで購入することにしている。しかもパッケージではなく，個別タイトルで必要なタイトルのみを購入している。しかしながら，購入を希望しても電子ブックでは提供されていないタイトルが多く，購入できたタイトルは，希望するタイトルのおよそ 1/3 程度にとどまった。電子ブックで購入できなかったタイトルは冊子体を購入したが，近年の洋図書にはオンラインアクセス権がついている図書が多く，図書館での管理・運用の難しさに直面している。その後も電子ブックのウェブサイトを確認し，代理店に問い合わせるなどして，電子ブック購入の可能性を探っている。また改版ものが提供されたタイトルは，追加購入している。

一方で，利用者への視認性を高める取り組みとして，電子ブックを契約した一部のタイトルについて，単行書の書架上に「以降の版は電子版のみの契約です」と書いた代本板を設置するなどの工夫をした。このような当館の取り組み事例を報告したい。

Ⅲ．結論と考察

今年度から本学のキャンパス再編に伴い，同一敷地内ではあるが，図書館と教室との物理的な距離が離れることになった。また 4 キャンパス 6 病院を抱える本学にとって，今後も継続的にタイトル数を拡充して，電子ブックがもたらすメリットを生かしていく予定である。利用者へのわかりやすさを考えると，ウェブサイト内の一括検索や電子ブックを OPAC に搭載するなど，まだ工夫の余地があると思われる。今後は学生に電子ブック搭載の PDA 端末を持たせて，授業に活用する方向性も検討されている。従来は図書館で契約可能な電子ブックのみを対象として調査してきたが，より利用者にとって身近な存在である個人利用の電子ブックについても，図書館で把握しておく必要があると考えている。

1) 城山泰彦，水嶋直子．電子ブック選定の際考慮することがら：順天堂大学での導入事例を通して，医学図書館．2011;58(4):297-303.